鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座　02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道　標

司教の手紙

ミサのカテケージス②

鹿児島教区司教　**中野裕明**

「ミサにあずかる」ことの意味

教区の皆さま、お元気でしょうか。

今回は「ミサにあずかる」ことの意味についてお話します。コリントの信徒への手紙の中で、パウロは次のように書いています。

「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」（Ⅰコリント10・16～17）

イエスによる最後の晩餐でのミサの原型の制定のことを聖パウロは信徒に思い出させ、それに新しい解釈を加えています。つまり、最後の晩餐での制定は、イエスの記憶を弟子たちが後世に残すために定められたのではなく、キリストと一体化することを指しています。換言すれば、キリストに同化する、という事です。「あずかる」とはそういう意味です。

別の箇所で、聖パウロは次のように言っています。

「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。娼婦と交わる者はその女と一つの体になる、ということを知らないのですか。（中略）しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです」（Ⅰコリント６・15～17）。

ここで、コリントの町の様子をお話します。

この町はアドリア海とエーゲ海の二つの海に面した商業都市であり、多種多様な人々が行き交う自由の空気が支配する、文化的中心地でした。住民と言えば、徹底した歓楽主義者、根っからの唯物論者で精神生活に対する理解と関心は皆無といった評判の町でした。

そんな環境の中で生きているキリストの教会の信徒たちに宛てられたのが先ほどの聖パウロの手紙の内容です。綺麗ごとではなく、道徳的に乱れている感性の中にいる人々に対して、いかにしてキリストのもたらすメッセージが福音となるように理解してもらえるか努力しているパウロには頭が下がります。

ところで、このパウロが用いる「あずかる」の意味を、彼の体験と、イエスの言葉の中で深めていきたいと思います。

パウロは自分のキリスト教への回心で出来事を、使徒言行録の中で、３回も記しています。

それによると、かつてユダヤ教の教師であったサウロがキリスト教徒をユダヤ教に引き戻す活動をしていたところ、復活したキリストがそれをとどめたのです。

「『サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである』」（使徒言行録９・４～５）。

つまり、サウロにすれば、自分が迫害をしている対象はキリスト信者であるはずなのに、イエスは自分を迫害していると言うわけです。

この時点で、サウロはイエスと彼を救い主と信じてその道を歩いている人たちは一体であることを悟ったのではないでしょうか。そして、キリストに帰依しました。

他方、イエスの話にも同じような文脈があります。それは最後の審判の場面です。

「はっきり言っておく、わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25・40）。

パウロの言う「あずかる」は原語ではコイノニアというギリシャ語が使われています。それは交わりと一致というふたつの言葉の意味を合わせ持つ言葉です。

ミサの中でキリストの体であるご聖体を頂く私たちは、同時にキリストの体にあずかっているという事実を実感すべきです。そうすれば、肉の体（肉の思い）から霊の体（霊の思い）へと変容させられ、教会共同体全体が聖霊に満たされるに違いありません。

最後に蛇足になりますが、毎週ご聖体を届けていた、目の不中な老婦人のお話をします。

長屋の一番奥の居室にいた彼女は、ご聖体拝領が終わると、いつも私と腕を組んで、５メートルぐらい先の玄関まで歩きます。そして言いました。「あー新婚旅行みたいだ」と。

イエス様と一致した最高の喜びの表現でした。

９月1日～10月４日は
すべてのいのちを守るためのの月間

教皇フランシスコは2019年に「すべてのいのちを守るため」をテーマとして来日し、多くのメッセージを残してくださいました。これにこたえ、実際的な行動を呼びかけるために制定されたのがこの月間です。

９月１日（正教会における「被造物の保護を祈る日」）から10月４日（アシジの聖フランシスコの記念日）という期間は、元は2007年の第３回ヨーロッパエキュメニカル会議が「被造物のための期間」として提唱し、世界教会会議によって支持されたものです。被造物を大切にする世界祈願日の制定を知らせる書簡において教皇は、この世界教会会議との同調を願っています。

すべての人が手を取り合わなければ、すべてのいのちは守れません。ですから、エキュメニカルな視点も諸宗教との協力も、ともに不可欠なのです。

上陸記念式とミサで平和を祈念

今年のキリスト教伝来記念祭

聖母被昇天の祭日に当たる８月15日（火）、恒例の「キリスト教伝来記念祭」が開かれた。

今年の記念祭の開催にあたっては、鹿児島市内にある六つの教会の主任司祭と教区本部で話し合って内容が検討され、鹿児島市祇園之洲のザビエル上陸記念碑前での「聖ザビエル鹿児島上陸記念式」と鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂でのミサ、その後の茶話会での実施となった。

16時にザビエル上陸記念碑前広場での式典に集まったのは30人余の信者たち。

ヨハネ福音書の朗読後、その信者たちに中野司教は、ザビエル書簡に描かれるヤジロウについて触れ、ザビエルとヤジロウの間には数々の深い対話と信頼があったことを紹介した。その後、ザビエルとともに福音を届ける役目を果たしたヤジロウのように、鹿児島の信者たちが福音宣教の道具となれるよう祈りをささげ、司教の祝福を受けてミサのささげられるザビエル教会へと向かった。

100人余の信者が集まったミサ

一方ザビエル教会では、18時からのミサの前に、ゆるしの秘跡を受けることができるよう準備され、またミサ開始前には16時からあった祇園之洲での聖ザビエル鹿児島上陸記念式の映像が流され、同地での司教のメッセージが伝えられた。

聖母の被昇天を祝い、キリスト教伝来を記念し、カトリック平和旬間を締めくくるこの日のミサには１００人余の信者が駆け付けた。このミサの開始にあたり中野司教は「マリアの導きを祈り、マリアの望む平和が実現するようミサで願おう」と挨拶。福音朗読後の説教でも、聖母被昇天の歴史と意義を解説した後に、カトリック平和旬間の意義、真の平和を見極めることの大切さについて、広島の平和記念式典にアメリカから原爆製造にかかわった二つの都市（サンタフェとシアトル）のある２教区からそれぞれ司教が巡礼団を伴って参加したことなどのエピソードを紹介し、加害者も被害者も悲惨な事実を記憶することが平和構築には欠かせないと話した。

ミサ後は、教会ホールに会場を移し、ささやかだが茶話会での信者たちの交流のひと時があった。

教区カトリック社会福祉施設
協会主催　研修会（公開講座）

日　時：9月21日（木）10時
場　所：教区本部2F　会議室
講　師：松田清四朗神父（コンベンツアル会）
テーマ：フォーカシング（言葉にならない意味を感じる）

暑さに負けず奉仕作業

奄美連合壮年会

▼赤尾木研修センター

７月２日（日）奄美連合壮年会（久保芳一神父顧問司祭）恒例の赤尾木研修センターでの奉仕作業がありました。

当日は30人ほどの参加があり、屋根のトタン替え、ペンキ塗り、コンクリート工事、庭の草刈りなど、それぞれの特技に合わせた作業で、７月末にある地区の教会学校の集いの準備にもなりました。

▼山間教会

７月９日（日）にも、奄美連合壮年会による山間教会の屋根のペンキ塗り、草刈り作業がありました。

午前８時からのミサで始まり、20人余の壮年によって集落の中で親しまれたオレンジ色の教会の屋根がよみがえりました。高齢化、少子化の中で島の教会を維持管理するのはますます困難になってきていますが、壮年の活躍に期待されるところです。顧問の久保神父も教会の今後の在り方について検討する必要性を訴えられました。

山間教会での奉仕作業に汗を流して

ザビエル像を清掃

カテドラル・ザビエル教会

７月28日（金）鹿児島カテドラル・ザビエル教会では、苔むすなど汚れの目立ってきた大理石のザビエル像の清掃を実施しました。

これはカトリック唐湊墓地の整備に協力してくれている㈱前迫石材店の奉仕で実現したもの。２代目ザビエル教会の鐘楼に立っていたときから町行く人を見守っていたこのザビエル像が真夏の暑さの中で、丁寧な作業で水洗いされ、真っ白に蘇った。

信者の本棚

「ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ　使命に殉じた禁教下最後の宣教師」

マリオ・トルチヴィア著

（北代美和／筒井砂訳　高祖敏明監訳）教文館　定価（２４００円＋税）

１７０８年10月、キリスト教解禁を訴えるために日本に潜入（屋久島に上陸）したがすぐに捕縛され、後に幽閉先の江戸のキリシタン屋敷で、世話役だった長助とはるに洗礼を授けたために衰弱死に追いやられたパレルモ教区司祭ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ神父について、学術的に著した初めての書物。

著者のマリオ・トルチヴィア神父は、これまで「シドッチ」と表されていた名前を受洗教会の洗礼台帳から「シドティとするべき」と明言。またシドティ神父の書簡や当時の様々な報告文からシドティ神父の真の姿と思いを描き出す。

信仰で繋がり絆を強める

ベトナムのカトリック信者の集い

仕事や学業のために鹿児島県に滞在しているベトナムからの若者たちの集いが８月12日（土）午後、鹿児島駅に隣接する「上町ふれあい広場」であった。

会場となった屋根付きイベント広場には、１００人を超えるベトナムからの若者が集まり、ベトナムのラバンの聖母の信仰について学び、またミサにあずかり、聖母行列などを行って交流した。

13時の青年の集いから始まったこの催し、14時30分からは１７９８年にタイソン朝によって起こったカトリックへの迫害を逃れて、フエ市郊外のラバンのジャングルに逃れた信者たちに現れた聖母への信仰についてティエン神父（溝辺教会）からの講話があった。

その後、中野司教の挨拶があった後、ザビエル上陸記念碑前広場までの1キロを移動し、司教から日本におけるキリスト教伝来ついて学習した。その後はティエン神父、アン神父、タム神父らによるベトナム語のミサがあり、ラバンの聖母を担いで行列するなどした。

参列した日本人の信徒たちは、ベトナムの若者たちの美しい聖歌の歌声と熱心な祈りの姿に心打たれたようだった。【左の写真はラバンの聖母像。神輿に変身するという台座は青年たちによる手作り】

ザビエル上陸記念碑前で記念撮影

イグナチオの霊操③

紫原教会主任司祭　貴島丈弥

ロヨラのイグナチオ

イグナチオの霊操を知るためには、イグナチオ本人を知っておいた方がいいので、「第一週」に入る前にイグナチオについて、私が調べられる範囲で紹介します。

イグナチオは、一四九一年にスペインのバスク地方のロヨラ城で、父ベルトランと母マリナの間に貴族の子として生まれます。彼は、後にローマでイグナチオと名乗るまではイニゴという名前でした。

ベルトランは優秀な騎士の家系で母マリナもその地方の重要な貴族の出生でした。この母を、イニゴは生まれて間もなく亡くし、父ベルトランも十六歳くらいの時に亡くします。

当時のスペインで高くあがめられ、尊敬されていた理想的な男性像であるこの父を理想像として若いイニゴも勇敢な騎士となるため教育され、成長します。そして、イニゴも死をも恐れない勇敢で忠実な気高い騎士、英雄となり、この世の栄光と称賛を求め、それらを手に入れ、この世的な欲もすべて満たしていきます。しかし、この理想像は一五二一年のパンプローナの戦いでの負傷により、内なる幻想とともに崩れていきます。

足に大きな怪我を負い騎士、兵士としてはもう生きていけないという現実、足の手術（麻酔なしで足の骨を削る二回の手術）のため片方の足が短くなるという外見的に〝醜い〟自分自身に直面し、無力感のうちに病床のベッドのうえでもがき続けるイニゴですが、ここから回心への道が開かれます。

彼の回心に大きく関わったのが義理の姉のマグダレーナです。彼女の勧めによって、イニゴはイエスや聖人たちの生涯についての本を読みふけることになります。

それまで、世俗的な官能や妄想にふけることが多かったイニゴは自分の中の変化に気付きます。聖人たちに思いを寄せているときと世俗的な事柄に思いを寄せているとき、そして、その後にくる感情、感覚の違いに気が付きます。これがイグナチオの良い天使と悪い天使からの声の区別、つまり識別の原点となります。そして、「歪められた愛着」にも思い至ることになります。ここからイニゴは聖なるものへと興味が惹かれていき、御子を抱くマリア様のヴィジョンによって回心することになります。

主な参考文献

イグナチオ・ロヨラ〝Autobiografia〟

ペドロ・アルペ〝摂理の人聖イグナチオ〟「世紀」

W.W. MEISSNER〝Ignatius of Loyola, The Psychology of Saint〟〝To the greater glory〟

+KABAYAN SEKSIYON+

Ang Bagong Pananaw ni San Pablo: Sa Pananampalataya Nagiging Banal ang Tao

Ganap na binago ang buhay ni Pablo nang makatagpo ni si Kristo sa daan sa Damasco. Si Kristo ang naging *raison d'etre* o dahilan ng kanyang buhay. Si Kristo ang nagtutulak sa kanyang apostolikong Gawain.

Sa kanyang mga liham maliban sa Pangalan ng Diyos na higit sa 500 ulit binanggit, ang pangalan ni Kristo ang sumunod na madalas banggitin (380 ulit). Kaya napakahalagang makita kung gaano kalaki ang nagagawa ni Kristo sa buhay ng isang tao at gayundin naman sa ating buhay. Sa katunayan, na kay Jesu-Kristo ang rurok ng kasaysayan ng pagliligtas kaya naman siya rin ang totoong natatanging simula ng pakikipag-diyalogo sa ibang mga relihiyon.

Sa ating pagtanaw kay Pablo, ganito siguro ang dapat na itanong: papaano ba nagaganap ang pagtatagpo ng tao at ni Kristo? At anong uring ugnayan ang nagbubunga rito? Mauunawaan ang sagot ni Pablo sa pamamagitan ng dalawang hakbang.

Una, tinutulungan tayo ni Pablo na maunawaan kung paano at gaano kahalaga at di-mapapalitan ang pananampalataya. Wika niya sa kanyang liham sa mga taga-Roma: "Sinasabi nga naming na sa pananampalataya nagiging banal ang tao at hindi batay sa gawang hinihingi ng Batas" (3:28).

Ganito rin ang isinulat niya sa kanyang Liham sa mga taga-Galasya: "Gayunma`y alam natin na hindi pinawawalang-sala ang tao sa pamamagitan ng mga gawa ng batas kundi sa pananampalataya ki Jesu-Kristo, at tayo man ay sumasampalataya rin kay Kristo Jesus upang mapawalang-sala ng pananampalataya ni Kristo, at di ng mga gawa ng batas. Sapagkat walang sinumang napapawalang-sala sa mga gawa ng batas" (2:16).

Ang "maging banal" ay ang maging matuwid-ang tangggapin ang Diyos dala ng kanyang katarungang puno ng awa sa pakikiisa sa kanya, at kasunod nito`y ang pagkakaroon ng malalim na pakikipagkaibigan sa kapwa: at nagaganap ito batay na rin sa ganap na pagpapatawad sa ating mga kasalanan.

Kaya tularan natin si Pablo sa kanyang buhay-pananampalataya para tayo rin ay mabago ang tunay na makasunod ki Kristo Jesus.

(Fr.Dino Orolfo)

ロザリオの祈りの集い

報告　古田町（マリア）教会

カトリック聖歌集３５９番「さつきのささきを…」によって古田町教会のシノドス前の「ロザリオの祈りの集い」（５月31日）は始められました。

５月の聖母月、10月のロザリオの月には日曜日を除く、毎日夜７時から特別の趣向で飾られた聖母像の前でロザリオの祈りがささげられています。８月には「マリア教会献堂」を記念して、８月15日の聖母の被昇天の祭前後の日曜日に聖母マリアを讃える「マリア祭」が行われていますが、５月と10月にも「ミニマリア祭」を実施しています。

小教区司牧評議会で５月（聖母月）のミニマリア祭の検討が始められた時、教区本部から「今秋、開かれるシノドス第16回通常総会の前に聖母の祈りのひととき、ロザリオの祈りの集いを行って欲しい。これは教皇様からの通達で、聖母マリアを保護者としている古田町教会にもお願いしたい」との連絡がありました。

古田町のマリア像

「聖母を通してイエズスへ」、カナの婚宴の席では「あの人の言う通りにしてください」との言葉から水がぶどう酒に変えられた奇跡の話もあります。

ロザリオの祈りの大切さ、頂く恵みの豊かさなど、講話の後、各奥義（黙想）を代表者がより細かい朗読をして、参加者は静かにそれを聞いて祈りは続けられました。

定刻６時に始められたこの集いが終わりの時を迎えたのは１時間後でした。参加者のほとんどが古田町教会の信徒でしたが、近隣教会からの参加者も数人いました。

教区経済問題評議会

６月25日（日）午後、教区経済問題評議会が教区本部を主会場に開かれた。会では２０２２年度の決算が承認されたほか、今年度の予算案も認められた。

また、維持費納入者が納入可能者数の20％（現在は15％程度）を割らない努力をするよう、司祭、信徒で協力し信徒に訴える必要性も確認された。

カリタス鹿児島2022年度収支計算書

2022.4.1～2023.3.31（単位：円）

収入の部	費　目	金　額	考
	前期繰越金	6,964,386	
	カリタス鹿児島献金	938,408	待降節献金（小教区及び個人献金）
	外国語ミサ献金	290,375	英語、ベトナム語ミサ時の献金
	ウクライナ支援募金	3,668,876	教区内呼びかけによる献金
	市民クリスマス寄付金	1,000,000	市民クリスマス実行委員会からの献金
	預金利息	49	
	収入合計	12,862,094	
支出の部	**費　目**	**金　額**	**考**
	ウクライナ支援（カノッサ修道女会）	2,600,000	①5/30：100万円送金 9/30：130万円送金 ③2/22：30万円送金＊
	ウクライナ支援（レデンプトール宣教修道女会）	2,600,000	①5/30：100万円送金 9/30：130万円送金 ③2/22：30万円送金＊
	トルコ南東部地震支援（カリタスジャパン）	400,000	2/22：40万円送金＊
	留学生支援	670,000	
	次期繰越金	6,592,094	
	収出合計	12,862,094	

注：＊は市民クリスマス実行委員会からの献金

４年ぶりにブイジュ祭

瀬留小教区

７月９日（日）瀬留小教区（主任司祭グレゴリオ神父）のブイジュ祭が４年ぶりに実施されました。

当日夕方、集落の墓地に眠るブイジュ神父の墓参りをし、教会庭にある歴代宣教師の碑の前で亡くなったすべての司祭に感謝の祈りを捧げました。その後のミサでは、教会を献堂し、19年間司牧にあたり、母国フランスに帰ることもなく召命を生きたブイジュ神父に感謝し、私たちのできる証を改めて考える機会になりました。

ブイジュ神父の墓前で祈る

《康由神父の聖書教室》65

「金持ち」とは？

「金持ちの青年・男・議員」と題された箇所は共観福音書すべてに載っていますが（マタイ19・16～30、マルコ10・17～31、ルカ18・18～30）、マルコにのみイエス様のところにある人が「走り寄って」という表現が見られます（10・17a）。

この言葉は「あなたによって心は広くされ／わたしは戒めに従う道を走ります。」という詩編を思い起こさせてくれます（詩編119・32）。もしこの箇所を踏まえているとすればこの男はイエス様によって心が開かれ、教えに従った行動をとっても良いはずです。ところがそのようにならなかったことにこの話の面白さがあります。

イエス様は「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」と些か格言じみたことを言われます（10・25）。この表現はシラ書の「砂や塩や鉄の塊の方が、／物分かりの悪い者よりも、担いやすい。」と似ています（シラ22・15）。

これを踏まえると「金持ち」とは「物分かりの悪い者」ということになります。

この「物分かりの悪い」という言葉は同じく詩編の「神を知らぬ者は心に言う／『神などない』と。」と関連付けて考えられます（詩編14・1a）。

原語では「神を知らぬ者」と訳された言葉は「物分かりの悪い者」に相当します。つまり金持ちとは「神などいない」という者と同じなのです。

そこでイエス様は「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」と言われたのです（10・23）。

「財産」という言葉はシラ書の中で「自分の財産を頼みとするな。『わたしは、何でも思いのままだ』と言うな。」、「人を惑わす財産を頼みとするな。いざというとき、何の役にも立たない。」と印象深く使われています（シラ５・１、８）。

まさに金持ちとは財産を頼みとして神様を信じないどころか、「いない」とまで言う愚かな者なのです。このようなことから詩編やシラ書を踏まえるとイエス様のところに走り寄って来た「たくさんの財産をもっていた」男がイエス様の言葉に従えなかった理由が浮かび上がってきます（10・22）。

会と催し　９月

１日（金）川渕勇神父命日（１９９７年）
３日（日）年間第22主日
▼被造物を大切にする世界祈願日
５日（火）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
６日（水）朴鎮亮神父叙階記念（２０１５年）
７日（木）牧山重光神父命日（２００５年）
８日（金）聖マリアの誕生
▼七田和三郎神父命日（１９８９年）
９日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
10日（日）年間第23主日
12日（火）コンベンツス・教区本部・10時
13日（水）中野アカデミー・教区本部・14時
14日（木）十字架称賛
15日（金）奄美宣教再開記念ミサ・聖心教会
▼鹿児島教区司教座教会献堂記念日
17日（日）年間第24主日
▼四條淳也終身助祭叙階記念（２００８年）
19日（火）教区司祭会・教区本部・16時30分
▼桃薗淳一郎助祭叙階記念（２００５年）
20日（水）中野アカデミー・教区本部・14時
▼久保俊弘助祭叙階記念（２００５年）
21日（木）聖マタイ使徒福音記者
▼子どもと女性の権利・教区本部・13時30分
22日（金）朴昶奎神父叙階記念（２０１６年）
23日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
▼教区カトリック社会福祉施設教会主催研修会・教区本部・10時
24日（日）年間第25主日
▼李秉徳神父叙階記念（２０１７年）
26日（火）鹿児島カリタス・教区本部・14時
▼ダニエリ神父命日（２００３年）
27日（水）メニッヒ神父叙階記念（１９５９年）
▼霧島彬神父霊名（ボグスワフ）
29日（金）聖ミカエル　聖ガブリエル　聖ラファエル大天使
▼バルビニ神父命日（２００４年）
▼松永正男神父霊名（聖ビンセンチオ）
▼竹山昭神父命日（２０１９年）
▼ティエン神父霊名（聖ガブリエル）
▼山浦義春神父霊名（聖ミカエル）
▼四條淳也助祭霊名（聖ガブリエル）

【司教日程】５日愛の聖母園、６～７日常任司教委員会（東京）、13日愛の聖母園及び中野アカデミー、12日コンベンツス、15日奄美宣教再開記念ミサ、19日教区司祭会、26日鹿児島カリタス

祈りの意向

【祈祷の使徒会】
教　皇　周辺に追いやられて生活する人々
日本の教会　すべての被造物

幼保連盟教職員夏期研修大会を終えて

名瀬聖母幼稚園　シスター下田るり子

鹿児島教区カトリック幼保連盟主催の第３回教職員夏期研修大会が、去る７月26日（水）27日（木）に開催されました。第一日目は鹿児島純心女子短期大学大講義室＆ハイブリット形式、第二日目はザビエル教会聖堂＆ハイブリット形式での実施となり、鹿児島県のカトリック幼保連盟教職員の学びの場として提供して頂きました。

令和５年度に連盟会長に就任された中野裕明司教様は開催の挨拶において「神様に愛されていることを子どもが感じ取れる教育を」と鼓舞されました。

講師として加藤正仁先生をお招きして「子どもたちの育ち辛さの背景を考える」を講演テーマとして、近年子どもたちを取り巻く社会の仕組みの中で、本来子どもが幸せに育つために与えられるべき環境が整えられていない現実を強く発信しておられました。

そのような状況にあって期待すべきことは、モンテッソーリ教育における異年齢保育において小さな社会をリアルに体験し、互いを尊重し共に学ぶことは個々の能力やスキルを高めることであり、インテグレーションの実現でもあると後押しして下さいました。

私たちは子どもたちの近くにあり、子どもの目線で物事をとらえ、子どもの真の必要に寄り添える機会を持つができるのだから、良いものを提供できるチャンスも与えられています。

「やみくもに舟をこいではいけない。浅瀬に乗り上げないか、急流が行く手を阻んでいないか」

たとえの意味することは、日々変化し続ける世界の状況や日本の政治は幼児教育にも無関係ではない、確かな情報なくして子どもと向き合うことは、かえってその成長の妨げになるのかと心に刻みました。

「感性を研ぎ澄まして子どもに向き合ってほしい」

長年教育の現場におられ、子どもたちの行く先をつぶさに見てこられた加藤先生の言葉の一つひとつは貴重な示唆となり今後の課題ともなりました。

研修会に参加するにあたり中野司教様が私たちに託して下さったことは「子どもたちが神様に愛され、両親に愛されていることを実感できるように導き、その主体性、自主性を大切な時に存分に発揮するようになる」ということでした。

さらに内なる呼びかけに応答できる信仰が子どもたちの人生の支えとなるならば、カトリック幼稚園・保育園で働く教職員としてこれほど大きな喜びはないでしょう。

ザビエル教会でのミサで祝福を頂き「行きましょう主の平和のうちに」と新たに派遣されました。

子どもの背後に育ち辛さが見えるとき一歩踏み出し、今なすべきことを時を移さず実行できますように神様に力を願い、感謝のうちに研修を終えることができました。

７月27日ザビエル教会での研修

祈りとグレゴリアンの集い

2023年10月15日（日）13時

祈り
- ・ウクライナ（世界）平和のため
- ・難民のため
- ・すべての人の命をまもるため
- ・家庭のため

グレゴリアン
- ・13曲（ミサ曲を含む）

演　奏
Coro Della Cappella Kagoshima
（教会内外同好者）

指揮：桃薗淳一郎（終身助祭）

会場：鹿児島カテドラル・ザビエル教会主聖堂

「とそ子ども食堂」より

２０１７年に始めた「とそ子ども食堂」は７年目を迎えました。

ここ数年はコロナ感染対策のため、ドライブスルー方式で弁当の配付を行ってきましたが、８月からは従来のバイキング方式に戻る予定です。

今後とも、ご協力・ご支援よろしくお願いいたします。とそ子ども食堂へのご寄付は以下の口座をご利用ください。

※鹿児島銀行　県庁支店
（普）３０１９３４９
名義　とそ子ども食堂

※ゆうちょ銀行
１７８３０－３２２５１７３１　とそ子ども食堂

昨年度の「収支決算報告」会計に関する監査は、４月16日に鴨池教会で実施され、すべて適正に処理されていることが認められました。（とそ子ども食堂スタッフ一同）

とそ子ども食堂2022年度決算報告

収入の部	金　額	備　考
寄付金	253,800	個人（延べ35人）　修道会（1）
食事代	90,800	大人（200円）454個
雑収入	154,006	預金利息　社会福祉課　県子ども食堂
前期繰越金	771,705	
合　計	1,270,311	
支出の部	**金　額**	**備　考**
食材	453.702	弁当（12回実施）1,119個
消耗品	54.837	ゴム手袋　マスク　ラップ　弁当箱他
雑費	20,746	送料　ボランティア保険
残高	741,026	
合　計	1,270,311	
残高明細	0	現金
	421,879	鹿児島銀行
	319,147	ゆうちょ銀行
合　計	741,026	

要　理

人間の居場所は？

神様は最初の人間としてアダムとエバを創られました。この二人は神様から食べてはならないと言われていた善悪の知識の木から実を取って食べてしまいました。この神様の戒めに反したことが「原罪」と呼ばれています。このため二人はエデンの園から追放されてしまうことになります。これにより人間は神様の永遠から分かたれ、死ぬべき存在になってしまったのです。であれば罪を犯さなかったとしたら人間は神様の御許で永遠にいられたということです。こから分かることは人間の本当の幸せは神様と共にいることなのです。

楽園から追放されて以来、神様とアダムとエバの末裔である人間との関係は決して交わることがない平行線になりました。神様はこのことを良しとはされませんでした。もう一度人間が御自分のもとに立ち返り、真の幸せの中で永遠に過ごしてもらいたかったのです。このためアブラハム、ヤコブ、そしてイサクといった太祖、またエリヤ、イザヤ、そしてエレミヤといった多くの預言者に御自分の言葉を語らせ、御自分の御許に戻るように人間に訴え続けました。しかしこの願いは脆くも崩れ去ってしまったのです。

とはいうもののこの時代の人々は神様が語られた救い主が来ることを待ち望んでいました。これまでの時代、即ち、天地創造から救い主であるイエス様がお生まれになる時代までのことを旧約時代と言います。またこの期間のことが旧約聖書に書かれています。旧約・新約聖書という時、「約」の字に注意してください。約束の「約」であって翻訳の「訳」ではありません。神様の救いの約束が旧い時代と新しい時代に分けて考えられているのです。